

～倅せの土台をつくる～

ftlビジネス・スクールは、働く喜びを感じられる支援を目指します。

関係者の皆様

このメールは、ご挨拶させていただいた方向けに発信させていただいております。

1. 新規利用者募集枠
2. 支援ノートNo.107『実践者に求められること①』
3. 近況
4. メディア関係案内
5. 研修・講演

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

1. 新規利用者募集枠

- ◆ 就労移行支援 ○ 余裕あり
- ◆ 就労継続支援B型 △ お問い合わせください
- ◆ 生活介護 × なし
- ◆ 就労定着支援 △ ftlの事業所を通過した方のみ利用可
- ◆ 計画相談支援 × ftlの事業所を利用する方以外の受入不可

2. 支援ノートNo.107『実践者に求められること①』

I. 社会参加に向けた援助策

就労や社会参加を目指している人を援助するとき、射程を大きくとって援助目標をたてるとするならば、それは、「教えてもらいやすい人」になってもらうということである。「ひと好きのする人」になれるといいとも思う。あるいは、もう少し控えめに、「どこか憎めない奴だ」と思わせる人になってほしいと希う。なぜかという、そのほうが絶対に、彼らの人生が豊かになるからである。

これをスキルと考えると、みんながみんな、訓練によって人好きのするようなスキルをもてるようになるわけではないだろう。あるいは、もう少し大雑把に人柄と考えたとしても、誰でもそういう人柄をもてるように育つという保証はない。従って、職業援助者たる者、どんな対象者に対しても、さしあたり次の二策をとる姿勢を持っていなければいけない。

その第一は、発達するタイミングを逃さず、その機会を積極的に活用することである。第二は、現在の対象者に周囲を合わせることである。第一と第二の割合は、相手によって区々である。大まかな傾向として言うならば、相手が若ければ若いほど第一に傾斜して援助するだろう。逆に高齢の相手ならば、第二を優先するかもしれない。

II. 発達援助

第一の策をもう少し具体的に言うならば、相手の伸びしろを信じ、成長や発達につながる

る関与をし、それを妨げる邪魔を除けることである。有り体に言えば、「経験から学ぶ」ということの促進であり、そのためには、戦略的に必要な時間と場所を稼ぐ必要もある。場合によっては、援助者は策に溺れない策士にもなる。

発達には、いくつかの段階に分かれ、新しい段階の初期にはそれまでの発達のゆがみを修整する機会に恵まれることが多い。幼児期から学童期、学童期から思春期、思春期から青年期、青年期から壮年期というように、舞台が変わり新たなフェイズに入るときや、人生の序破急などの移行期間において、予想外の発達が起こりうる。例えば、家庭の中でしか通用しないような偏った習慣を修正する機会になることも多い。そして、この『移行期間』には、人生の豊かさがつまっている。そこに関わるのが僕らの仕事である。しかし、残念なことに、多くの支援はこの大事な機会を生かせていない。

対象者が養育者や援助者との二者関係を超え、脱中心化し、三者以上との関係をつくれるようになることを社会化と呼ぶとすると、その時点で援助者が果たす役割はとても大きい。対象者が社会に出て、その一員として生きていくには、とっかかりとして、①共同作業、②競争、③妥協、の3つを経験し、身体に馴染ませなければいけない。

真っ当な判断に必要な情報を共有するという大事なプロセスをそっくり抜いてしまった、今日的な形式的自己決定論は、お互いの「ひとりよがり」を強化するだけに終わり、支援者は対岸の火事を眺めるがごとき観察者となる。それでも何かの機会をとらえて成長していく人がいるのはすごいことだと思うが、そのすごさにすら気付けない支援というものが多数派であることは情けないの一語に尽きる。

「支援したのに成長した」というのはよくあることだが、この皮肉に気付けない支援者はとても多い。支援という名のもとに「対象者の成長を妨げる邪魔」をしている支援者は存外多く、そのことに気付かずに自己満足している支援者も同じく多い。自分も含め、十分に気をつけなければいけないことだと思う。

Ⅲ. 援護

第二の策である環境調整は、庇護という概念に近いアプローチである。妥協の産物としての環境調整と言ってもいい。これが必要な場合もあるが、使うのであれば混乱の激しい一時期に限らないと、人に備わっている様々な機能を脱落させてしまうという愚を犯す。漫然とこれを続けることによる副作用は大き過ぎると言わざるを得ない。導入するなら期間を限定すべき策であり、常にモニタリングしていなければ人生を豊かにする戦略の軌道は描けない。そういう意味で、大きな射程を持った軌道をイメージできなくさせる策だとも言える。しかし、援助者はこの策に溺れやすい。理由は簡単で、瞬間瞬間についてだけ言えば、第二の策のほうが楽だからである。これを日常的な言葉に置き換えるとすれば、「その場しのぎ」ということになる。

それでは、いついかなる時も「その場しのぎ」は禁じ手なのかというと、必ずしもそうではない。対象者に余裕がなく、風向きが悪ければ、そうやってその場をしのがなければいけないこともある。これを時間を稼ぐと言い換えると、前向きにとらえられる。要するに、援助者に求められるのは、環境調整の方法に関する知識よりも、的確な状況判断能力なのである。

IV. evidence と evidence-based の違い

実践する者として、ある人の社会参加に向けた援助策を考える時に、敢えて難易度の高いケースから考えると、その後の発想が豊かになる。そこで、前回まで連続でテーマにしていた強度行動障害という状態像を持った人たちの社会参加について考えてみたい。

前回の小欄に書いた強度行動障害支援者養成研修で話される内容における根拠の1つに、1998年から9年間に渡って我が国で行われた強度行動障害者に関する研究をまとめた論文(『国立のぞみの園紀要』障害福祉サービスとしての強度行動障害者支援の到達点と課題 志賀利一,2017)には、2004年に集計されたデータが記載されている。そこでは、支援内容として有効とされるものの順に、次のように支援方法が並べられている。(強度行動障害に有効な支援内容 飯田,2004より)

- ①構造化(100%)
- ②コミュニケーション(80%弱)
- ③薬物療法(50%)
- ④キーパーソン(40%弱)
- ⑤静穏環境(35%)
- ⑥生活リズム(30%弱)
- ⑦成功経験(25%)
- ⑧時間をかける(25%)
- ⑨許容導入(20%強)
- ⑩障害理解(20%弱)
- ⑪対処方法獲得(20%弱)
- ⑫折り合い(20%弱)
- ⑬集団生活(20%弱)

以上が、20年前のデータである。不思議なのは、これを集計してから20年経った今でも、これをそのまま根拠として引用する人が後を絶たないということである。繰り返すが、このデータは、20年間という時間の経過を織り込んで追跡調査と検証をし、仮説を立て直すという作業をせずに、僕がここに書き出したデータである。ということは、厳密に言うと、今現在このデータが信頼できるとは言えない。なぜ20年前の古いデータが、ベストプラクティスとしてゾンビのように現れ、根拠として引用され続けているのか。僕はその理由を寡聞にして知らない。

しかし、想像するに、この①→⑬の順番は、2004年当時、即効性のある支援内容として順位付けられ、並べられたものだったのではないだろうか。当時は、新鮮なデータであったため、即効性=有効性であった。そのため、これを「有効な支援内容」と表記しても、何ら問題なかったという意味である。しかし、これを20年経過してから「有効」であるとするのは違うと思う。20年前の古いデータを「有効」だとして引用するのであれば、当時のデータをとるために参考にした人たちの20年後を数例でもいいから見て、その上で実際に見た人について、有効だったか無効だったかについての判断をする必要がある。その上で、少なくとも、僕が直接見た範囲の人たちについては、この有効性の順位は間違っていたと断言できる。

以前にもどこかで述べたが、エビデンスがあるとして発表されているデータが、そのま

ま目の前にいる人に当てはまるかどうか、目の前にいる人は小数群に入るのでないか、あるいは時間という変数がかかると結果が変わるのではないかと、念のため疑ってみるのが現場の仕事である。"evidence-based"とは、本来そういう態度を表すのではないか。教科書通りにやって人が幸せになるのなら、こんな楽な仕事はないと思うけれど、残念ながらそれはあり得ない。

これは僕の勘であるが、20年前に有効性が高いほうから並べられた支援方法の順番は、20年後に検証してみたら、ほぼ逆転するのではないかと思う。試しにここで、僕の実体験に近似する架空の事例をあげてみたい。事例にあげるのは恭平という男性で、現在35歳の青年である。診断名は重度精神発達遅滞と広汎性発達障害で、僕は彼を20年前から知っている。総合的に言うならば、彼は上記の「有効な支援方法」(ベストプラクティス)にある順位(20年前のエビデンス)にとらわれない援助と教育の中で育ってきた。それは、過度な構造化を避け、仲間たちと関わり合い、共に暮らす機会を保障する方向での援助であり生活であった。こういう例を複数知っていると、20年前に提示された「有効な支援方法」の順番は、にわかに怪しく思えてくる。僕は、ベストプラクティスの順番があべこべになる可能性があると感じている。

恭平は、乳児期から夜泣きが激しく、昼夜逆転が常という子であった。幼少期には、声をかけても振り向かず、ひたすらミニカーを並べる独り遊びに没頭していた。保育園の先生から専門医に診てもらうことを勧められて診察を受けると、自閉スペクトラム症という診断がでた。小学校低学年時代まで、多動でじっとしていられず怪我が絶えない子であった。また、物音が鳴るとビクツとして驚き、パニックになる。両親は聴覚過敏を疑った。

その後、療育の先生から、構造化の支援(課題やスケジュール、空間の構造を区切ることでわかりやすくする)を紹介されて、実行に移された。一時的にパニックは減ったが、構造化の支援をすることが目的になってしまい、それが結果的に対人関係を希薄にしたのは失敗だった。生活のほとんどが「物」と「彼」との2者関係になってしまった。また、聴覚刺激の弁別能力は、大人になるまでの間、年齢と生活経験を重ねるごとに上がっていくものだが、そういった発達も止まってしまった。人間の聴覚は視覚を補足する重要な役割を担っており、これが機能しないと、不測の事態が発生したときに、視野の範囲内でしか情報を得られないため、全体的にとっても不安が強くなる。また、不意打ちにも弱くなる。後のことを考えずに行われる構造化は、必要な聴覚機能の発達を止めてしまうという副作用があるため、慎重でなければいけない。僕は恭平の様子を見て「本当の聴覚過敏ではない」と判断し、音を細かく聴き分ける機会を増やすようにした。混乱しそうな場面においては、大人が彼に寄り添いながら、一緒に落ち着いて聞き分ける時間を過ごすことにした。これは、特別な設定を必要とするものではない。普通の環境で、耳から入った音を聞き分けることで上手く行った経験を積み重ねるのが基本である。例えば、簡単な指示を出してそれに応えてもらうことから始め、指示内容を漸次複雑にしていくことや、一緒に本を読んだり音楽を聴いたりすることなど、いくらでもやれることはある。いちばんいいのは、聞き分けるという体験を通じて、何かを分かち合えたという感情が生じることだ。ヘレンケラーが「水(water)」を初めて他者と共有した時のように。

子どもが認識能力を発達させるということは、その時その場で注目すべき対象(signal)

に注意を向け、その時その場においては不要な対象（noise）を意識の辺縁に退かせることである。つまり、noiseに惑わされずに生活目標であるsignalに集中できるようになることを一方の目標に置く。もう一方で対人関係や対社会関係が広がっていくことを目標にするといふ。この両翼にある目標は、互いに影響し合いながら少しずつ高次の目標に向けて達成され、子どもは社会という大空へと羽ばたく力をつけていく。こういった訓練をするのに、なにも特別な場をしつらえる必要はない。できる限り生活や仕事の場を使うようにしていくといふ。そのほうが汎化しやすいのである。

また、どの刺激を選び、どの刺激を背景に退かせるかという調節機能は、社会的文脈を教えることで、生き抜いていく上で有利になるように発達していく。共有されるべき文脈は生活や仕事の中に存在する。従って、その場面を共有することが大事になる。さじ加減の下手な支援者がしつらえる構造化は、この大切さを忘れさせてしまう方向に作用する。本来、文脈に沿って意識や注意を機能させることが人としての姿である。そしてこれは、人にしか教えられないし、失敗すれば周囲との一体感は得られなくなる。

誰もが孤独のままではいられない。従って、どのような課題に取り組むにせよ、それが社会や周囲の人と、どうつながっているのかに気づけるような場面設定をすることが眼目になる。僕は可能な限り、そのことを心がけた。生活即訓練である。

もう一つ大事な課題がある。恭平を見ていると、刺激を弁別する前に身体が反応してしまっている。これは、たいへん不自由に見えた。恭平にしてみると幼少の砌からのことで、不自由さを訴えてくることはないのだが、自分の身体をコントロールする術を持たないということは、勝手に走り出す自動車に乗っているようなもので、やはり生きていく上で支障がある。そのため、無駄な反応を止めていられるようなコントロール力が育つような援助に注力した。「変に緊張せず、とにかく動かない」という課題で、同一姿勢の保持訓練というものである。恭平は、初めのうちこそ、勝手に動く身体、程良く止まらない身体に苦労していたが、一緒に乗り越える人がいるという実感に勇気づけられたか、少しずつ静止していられる時間をのばしていった。同時に、学習効率が上がり、色々な対人関係の中で経験を拓げていくことができるようになっていった。

その頃から、恭平にハプニングから学ぶ力がつきはじめ、想定外の事件に対して全体的に狼狽えるようなこともなく乗り切れるようになってきた。その後も恭平は成長を続けている。仲間がいる環境の中で、共同作業、競争、妥協、の3つを経験し、自他の折り合いをつける体験を積み重ねながら、3者関係を恭平なりに体験し、違和感なく受け入れるようになった。このことは、一緒に生活をしたり働いたりできる仲間が増えたことから証明できると思う。大変なことも多かったが、恭平は地道に一般的な環境に適応する力を伸ばしていった。

時間をかけて成功経験を積み重ねるうちに、彼と仲間との共同作業 cooperation が仲間との協力 collaboration へと発展していった。仲間と共に、場と成果を分かち合いながら共通の目的を達成する体験は、恭平の世界を急速に拓けた。

やがて恭平は『われわれ We』という概念を持つようになる。恭平自身が『われわれ We』の一員として、そこへの参加に意義を感じることは、その人にとって、外の時間内の時間を合わせることへの動機づけになる。相手と自分との間にある共有対象のほうを向きながら、主体的にそこに合わせるということであり、これこそが社会の中で生きてい

く醍醐味である。同時にこの体験は、生活リズムを整える動機にもなった。幼い頃から両親を悩ませていた恭平の昼夜逆転は、前思春期を迎えるタイミングで修正されていったのである。

こういった総体的な状況変化は、恭平にとってのキーパーソンを増やした。これは同時に、彼の言葉や動作にコミュニカティブな（ひとり言ではない）要素が含まれるようになっていく経過と重なっている。一般的に、このような段階に至ると、物理的な環境調整型援護は然程重要でなくなる。むしろ、漫然とそれを続けることはホモサピエンスとしての重要な機能を脱落させる「廃用への傾斜」を意味する。従って、環境調整については、平均的な範囲を超えない程度にしておくのが妥当である。ちなみに、薬物療法についても同様の考え方があてはまるのではないだろうか。

思春期以降、恭平は見習うべき先輩や大人たちを見て「就職したい」と言い出した。そこで、賃金をもらうための仕事にチームで取り組む体験を積むために、就労支援施設を利用することにした。訓練施設選択の眼目は、チームワークであった。多少なりとも社会的に責任ある仕事を任せられ、それを共通目標にした人たちの中で過ごすこと。加えて、仲間と協調し、協力し合いながら、それを遂行する経験を積むことである。これは、恭平をたくましく成長させた。やがて恭平は、援助者と一緒に就職先を探し始めた。彼は援助者と意見交換をし、好き嫌いのような浅い感情に流されることなく、自分の将来について真剣に考えた。企業実習のチャンスにも恵まれて、訓練施設とご縁のあった軽作業中心の仕事に就き、多くの仲間にも恵まれながら働くに至っている。

念願かなって就職した恭平であるが、今でも喋れば（あるいは、黙っていても）、彼が療育手帳を持っている人だと周囲は気付く。コンサートに行くのであれば、ロックは避けてクラシックを選ぶ。しかし、仲間の前で率先して挨拶をするし、わからないことは質問もできる。自分がしてきた苦労を言語化するほどの力はないけれど、幼児期と違って仲間たちとの関係を尊び、生活リズムも整っている。休日は高校時代の友だちと一緒に電車に乗りに行く。恭平は、その人生において働くということが、こういった楽しみを際立たせるように作用することに気づきつつある。苦労もあるが、それも含めて人生に目鼻をつけるためのスパイスとして肯定的に受け止めているようである。

僕は、そんな恭平の姿を見て、就労自立に向けた訓練とは対象者に余裕を作ることであり、就職する時は弓矢の弦を十分に引き絞った上で矢を放つが如きタイミングをイメージするのがいいということを学ばせてもらった。また、就職後の生活とは、放った矢が滑空するのに似て、風を味方につけて僅かに放物線を描きながら、的を射貫くまでの時間を上手に過ごすことであろうと予想している。就労支援とは瞬間的なものではなく、幼い頃から営々と積み重ねてきた努力を引き継いで、上手に結実させるターニングポイントと、その先に続く長い人生を応援することだと言ってもいいだろう。

つづく

令和6年7月15日 高原浩

※ 支援ノートの記事は、事例として挙げられている人が特定されないように配慮されており、趣旨が変わらない範囲で名前や場所などの事実を加工してあります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

3. 近況

【就労移行支援 ftlビジネス・スクール】 **新規利用者募集中**

知的発達症を含む神経発達症や精神疾患のあるかたたちが、実践的な環境で企業就労と社会参加に必要な心構えやスキルを身につけています。就職先とのマッチングは、利用期間中の体験的かつ実践的な経験を支援者と利用者として分かち合いながら行うことを目指します。

基礎訓練段階からのトレーニングが必要な方にも利用しやすい就労移行支援事業所です。療育的な視点で再評価し、個々にボトルネックになる課題を明確にすることで、具体的な傾向と対策を共有しながら就職に向けての援助を行います。

就職後に成長できる適職場に就けるような余裕を作ることを目標に、利用開始段階から多角的な評価と見立てをしっかりと行います。また、就職後には、継続して就労定着支援（通常3年半）を利用し、安定就労や自立に向けての援助や助言を受けることができます。

令和7年3月に特別支援学校高等部・高等学校・専門学校・大学などを卒業される方の利用枠もあります。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

【就労継続支援B型 ftlビー・ワーク】 **お問い合わせください**

当事業所は、じっくりと腰を据えて就職を目指す方を対象にしたB型運営をしています。長い目でみつつ企業就労を明確な目標にしている方が利用しています。ftl就労移行支援のクオリティーはそのままに、就労継続支援B型の制度を利用して就職と自立に向けての援助を行っています。

また、将来的にftlの就労移行支援を使いたいという方にもお勧めです。日中、社会的役割を得て仲間と共に働くということを中心に据えながら、生活リズムと様々なライフスキルを整え、張りのある生活ができるように、日々の援助をしていきます。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

工賃収入を得て、社会参加していることを実感しながら過ごせる環境は、自尊心を下げることが防ぎ、働き暮らすスキルと自信をつけます。

【発達保障型生活介護事業 ftlビー・ワーク】 **見学可 実習については応相談**

発達保障の理念を掲げ、社会参加の手段として『働くこと』をベースにした生活介護事業所です。利用者は皆、社会の中に役割を持ち、工賃も稼ぎます。糸賀一雄さんの言葉「この子らを世の光に」を実践したいという想いと共に始まり、若々しいメンバーが、仲間意識を持ち、張り切って仕事に就いています。療育的な視点を持って成長発達を保障することを目的とした事業所です。基礎的な力がついた方については、就労移行支援や就労継続支援B型の現場で実習する機会を設けています。また、働くだけでなく、一体感を楽しみながらの仲間作り、生活技能習得プログラムや地域のかたたちといっしょに活動するプログラムも実施しています。

<http://www.ftl-1.co.jp/lp/lifecare/>

【就労定着支援事業】 ftlの事業所を通過した方のみ利用可

就労移行支援や就労継続支援を使った後に企業へと就職した方たちを対象にした、職場への定着支援事業です。人となりをつかんだ上での、テーラーメイドの就労定着支援です。

<https://1drv.ms/b/s!Ah7JHDWO-znfx3thUQpVzZLqFVL7?e=kVqNYL>

【計画相談支援 ftlアクセス】 ftlの事業所を利用する方以外の受入は中止しております

児童・成人とも対象にしております。フォーマルな障害福祉サービスを使う方を対象に、サービス利用計画を作成したり、様々な生活相談に応じる支援を行います。

* 土曜プログラム・特別プログラムについて (ftlの就労移行支援・就労継続支援B型利用者が対象です)

土曜日に行われるプログラムです。以下が、プログラムの例になります。

① どだいの会 (身体感覚の発達・状況判断能力・社会性を発達させます)

社会適応の障害になり得る発達の凸凹や遅れは、脊椎を中心にした身体図式、身体の基本動作、感覚器の使用、記憶と操作、指示理解と把持などが大きな要素になって形成されます。どだいの会では、楽しみながら身体動作の状態を確認し、個別訓練メニューを考えたときのヒントとして現場へとフィードバックします。まさに、就労自立の土台になる活動です。

② ICT教室 (PC技能訓練)

WordやExcelの使用方法を中心に、基礎から学びます。あわせて、事務的な作業指示に対する理解度を確認し、傾向と対策をつかみます。働き始めたときに役立つ様に、メンバーの段階に合わせてプログラム設定を行います。

③ 「和太鼓講習」

市民グループ『富士見太鼓の会』様の稽古に参加しながら、和太鼓を楽しみ学びます。

<https://www.fujimitaiko.com/>

和太鼓の良さは次のような点にあります。

- 音階がなく、強弱とリズムで表現するため、わかりやすい
- 耳よりも身体全体で感じる音であるため、認識能力の差があっても共有しやすい。非言語コミュニケーション能力が育つ。
- アイコンタクトをとり、息を合わせて全員でひとつの曲を演奏するため、仲間との一体感や、場を分かちあう感覚を楽しみながら得られる。
- 腰を入れた動作を主としており、随意筋と不随意筋を協調させる運動である。

④ 専門講師による特別プログラム

就労自立を達成するために必要な知識をワーク形式で身につけていく場です。社会生活を維持するために不可欠な内容が中心になります。オープンな雰囲気、楽しく真剣に学びます。

⑤“自立講座”“OBとの交流会”等

就労自立生活の実際について、専門家や経験豊富な職員が、利用者の皆さんにわかりやすく説明します。OBとの交流会では、ftlから就職した先輩たちが、今活躍している職場や仕事の説明をしてくれます。それを題材に就職についての理解と意識を深める場になります。どれも、就労自立に向けての意欲や意識を高める大切な時間になります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

4. メディア関係案内（全て、全国の書店やインターネットから購入できます）

○『家族で支援する発達障害 自立した進学と就労を進める本』 高原浩 監修
河出書房新社

<https://www.kawade.co.jp/np/isbn/9784309254524/>

選択肢が増えたように見えて、実は問題点も多い進学と就労について、現実の課題をわかりやすく解説した上で、自立した選択ができるようになるための実践的な情報を伝えます。

○『現場発！知的・発達障害者の就労・自立支援』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034370.html>

重版（3刷）好評発売中です。

○『飼い殺しさせないための支援』 高原浩 著 河出書房新社

***全国学校図書館協議会選定図書に選定されています。**

<http://ap27.eurotec.ne.jp/np/isbn/9784309248943/>

○『現場発！ソーシャル・インクルーシブとインクルーシブ教育』 高原浩 著 学事出版

<https://www.gakuji.co.jp/book/b10034212.html>

著者の体験談を基に、ソーシャル・インクルージョンを障害福祉の現場から具体的に問い、インクルーシブ教育を教育現場の実践者との対談を通じて考える本です。障害福祉の本質に迫ります。日本教育新聞の書評に掲載されています。

<https://www.kyoiku-press.com/post-211922/>

○ジョブメドレーアカデミー オンライン研修講師として登壇中（下記リンクは、案内のみです）

『個別支援計画と支援方針の立て方～就労支援編～』

『サービス管理責任者向け研修』

<https://jm-academy.jp/syougai-fukushi>

○NPO法人 日本インクルーシブ教育研究所 多様な発想支援士養成講座

『対人援助のコツ ～非施設的实践の現場から～』

<https://x.gd/TaltY>

<https://www.jiei.org/tayounahassou/step4itoshi/#i1-3>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

5. 研修・講演について

● 通年 神奈川県立中井やまゆり園 支援改善アドバイザー

- 令和6年7月15日 シンポジウム ダイバーシティ&インクルージョン社会を目指して
- 令和6年7月27日 社会福祉法人 朔日 NPO法人 朔日の会
児童・成人部門 職員研修

研修講師・講演のご依頼につきましては、直接お電話いただくか、メールまたは以下のお問い合わせフォームからどうぞ。

<http://www.ftl-1.co.jp/contact/>

<http://www.ftl-1.co.jp/>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

令和6年7月15日
ftlビジネス・スクール/ftlビー・ワーク
サービス管理責任者 高原浩